

台湾閩南語の研究：日本漢字音研究への展開

陳, 子博
九州大学大学院（修士課程）

<https://doi.org/10.15017/12078>

出版情報：語文研究. 48, pp.48-65, 1979-12-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

台湾閩南語の研究

— 日本漢字音研究への展開 —

陳 子 博

現代中国語諸方言の音韻論的研究は、中国語音韻史の研究に重要な役割りを果たすものであると同時に、日本漢字音の如き外国借音Vの研究にも、資すべき点の少なくないものである。

ことに、閩南語を初めとする南方の諸方言についての研究は、唐宋時代中央語の音韻的特徴を知る上で甚だ重要な意味を持つと同時に、これと密接な関係を有すると見られる借音||日本漢字音の漢音・新漢音・中世唐音等||の性格を解明する上でも、大きな意味を持つものと思われる。したがって、その両分野を見据えたかたちでの、詳細な調査研究が望まれるのであるが、これまでのところ、具體的な試みはほとんど行なわれていなかったように見受けられる。

本稿において筆者は、そうした状態を打開すべく、以下に示す如き若干の試み||台湾閩南語の入声韻尾・鼻音韻尾をめぐる研究||を行なってみようと思うのである。

諸賢の御批正を賜われれば幸いである。

一、台湾閩南語の概要

まず、台湾閩南語がいかなる音韻体系・音韻的特徴を持つものであるか、その概略を示しておきたいと思う。次の表は、台南において調査した台湾閩南語注1の音韻体系を、分析整理したものである。

〔声母〕

p	p'	b	m
t	t'	l	n
c	c'	z	s
k	k'	g	ŋ
ʔ			h

〔韻母〕

① 聲 類

a	ai	au	e	o	e
i	iu	ia	iau		ie
u	ui	ua	uai	ue	
ã			ãi	ãu	ẽ
					õ

② 鼻音化韻母

① 入類 I
 ap at ak
 ip iap it iat iak ut uat
 ② 入類 II
 au? e? a?
 iau? iau?
 ③ 陽類
 am an au
 iam in ian iag
 un uan uan
 ④ 入類 I
 ap at ak
 ip iap it iat iak
 ut uat
 ⑤ 入類 II
 au? e? a?
 iau? iau?
 ⑥ 声化韻
 m n
 ⑦ 声化韻
 au? e? a?
 iau? iau?
 ⑧ 声化韻
 au? e? a?
 iau? iau?

(声調)

調名	陰	平	陽	上	陰	去	陽	去	陰	入	陽	入
調型	高平調	上昇調	下降調	低平調	中平調	低平調(短)	高平調(短)					
調値	55	24	51	11	33	32	4					
例	君	裙	滾	棍	郡	骨	滑					

三内鼻音韻尾-m-n-ŋの区別・三内入声韻尾-p-t-kの区別を存すること、七種の声調の区別を持つこと等、かなり古い時代の中国語の

趣きを伝えていていることは、一見して明らかである(文献によって確かめられるところでは、そうした諸特徴は、唐代の中央語に関し

二、入声韻尾の実態

て、ほぼそのままに認められる)。しかし、その一方で、比較的新しい要素と見られる鼻音化韻母・入類韻母IIの一群も認められ、この体系が、次第に、そうした複雑な区別を持たない方向(m-n-ŋ-V鼻音化韻母・p-t-k-V-?の如き方向)へ動きつつあることも、確実なようである(後述)。

以下、そうした音韻的区別の存在と、変化動向の問題を中心に、考察を進めて

台湾閩南語における三内入声韻尾の実態については、既に、有坂秀世博士が、その論考「入声韻尾消失の過程」(『国語音韻史の研究』増補新版所収)において、詳しく触れておられる。それによると

……入声は短促だというから、国語の促音のようにパッと促るのかと思っていたら、大いに予期に相違していた。……台湾の入声の場合には、中心母音の後で息が一度弱まると、もはや再び強まること無く、弱まったままで p, t, k の閉鎖が作られるのである。故に、韻尾 p, t, k は殆ど聞えず、或は殆ど声門閉鎖音かと聴き誤られる位である。p, t, k の閉鎖は、勿論ごく柔かに作られる。且、声帯の振動は、p, t, k の閉鎖が作られて後に始めて止む。…故に、聴覚的効果から言えば kɪp, kat, kək よりは、寧ろ kɪb, kad, kog の方に近い。……つまり「短促」と言っても、国語の促音などのように「急に止る」のではない。寧ろ、「急に消える」という感じである。

と云うことになる(傍点「・」筆者)。

この指摘は、非常に的確かつ周到なものと言って良い。ただ、博士は、それら入声韻尾と密接な関わりを持つところの入声門閉鎖音 V については、右の傍点部の如くごく簡単に触れられただけで、充分に検討を加えられることがなかったようである。

同論考の趣旨に照らして聊か不可解なことと言わなければならぬが、ここでは、それについて若干の補足を加えるとともに、関連するいくつかの問題についても考察してみたいと思う。

まず、次の表を御覧頂きたい。

表1

			中古音韻尾
-k	-t	-p	台湾閩南語
0	3 (2.5%)	41 (59.4%)	-p
8 (4.3%)	67 (54.9%)	5 (7.2%)	-t
88 (47.3%)	3 (2.5%)	1 (1.4%)	-k
70 (37.6%)	44 (36.1%)	18 (26.1%)	-ʔ
20 (10.8%)	5 (4.1%)	1 (1.4%)	-∅
0	0	3 (4.3%)	その他
186 (100.0%)	122 (100.0%)	69 (100.0%)	計

表II

江	通	山	臻	咸	深	攝
-k	-k	-t	-t	-p	-p	台湾閩南語
0	0	3 (3.9%)	0	25 (50.0%)	16 (84.2%)	-p
0	1 (1.9%)	30 (39.5%)	37 (80.4%)	5 (10.0%)	0	-t
7 (58.3%)	32 (59.3%)	0	3 (6.5%)	0	1 (5.3%)	-k
3 (25.0%)	14 (25.9%)	41 (53.9%)	3 (6.5%)	18 (36.0%)	0	-ʔ
2 (16.7%)	7 (13.0%)	2 (2.6%)	3 (6.5%)	0	1 (5.3%)	-ϕ
0	0	0	0	2 (4.0%)	1 (5.3%)	その他
12 (100.0%)	54 (100.0%)	76 (100.0%)	46 (100.0%)	50 (100.0%)	19 (100.0%)	計

曾	梗	宕
-k	-k	-k
0	0	0
7 (21.9%)	0	0
15 (46.9%)	20 (36.4%)	14 (42.4%)
9 (28.1%)	29 (52.7%)	15 (45.5%)
1 (3.1%)	6 (10.9%)	4 (12.1%)
0	0	0
32 (100.0%)	55 (100.0%)	33 (100.0%)

表Iは、古代中国語^{注3}において入声に唱えられた字三七七例について、その、台湾閩南語における発音を調べたものであり、表IIは、それを攝によって分類し、さらに詳細に分析できるようなにしたものである(表中、「-ʔ」は声門閉鎖音を、「-ϕ」は無韻尾であることを示す^{注4})。

この二つの表から、次のような事実を見出すことができるはずである。即ち、

- ① 古代中国語における入声韻尾-p-t-kは、台湾閩南語において、各々50%前後保存されている。
- ② 残り50%のものは、或るいは声門閉鎖音に変化し、或るいは他の韻尾と混同するなどして、区別の曖昧化する様相を見せている。
- ③ 声門閉鎖音化の傾向が著しいのは、三者のうち、特に-kと-tとである。
- ④ 攝の分類に照らして言えば、咸攝の-p・山攝の-t・梗攝宕

撰の-kに、声門閉鎖音化の傾向が著しいようである(但、
-kについては、通・江・曾各撰のそれも、かなり声門閉鎖
音化が進んでいると見て良い)。

云々。

結論として、台湾閩南語における入声韻尾-p-t-kの区別は、かなり曖昧になって来ており、徐々に声門閉鎖音化(↓無韻尾化)する方向をたどっている、と言えそうである。

これは、有坂博士が上記論文において推定された入声韻尾消失の過程Vと、きわめて良く一致するものであり、その推定の正しさを裏づけるのに与って力有るものと思われる。博士が台湾閩南語の

表Ⅲ

通		撰	
(拗)屋	(直)屋	韻	
-k	-k	中古音韻尾	
六 ^ロ ク 肉 ^{ニク} 福 ^フ 目 ^メ	獨 ^{ドク}	吳音	日本漢字音
六 ^リ ツ 逐 ^チ ク 六 ^リ 肉 ^{ニク} 覆 ^フ 福 ^フ 肉 ^{ニク} 畜 ^{チク} 目 ^ボ	獨 ^{ドク}	新漢音	
蓄 ^{シュ} -φ 六 ^ル 伏 ^フ 目 ^メ		中世唐音	音
六 ^ロ ク 伏 ^フ ツ 宿 ^{ソク} 畜 ^{ヒョク} 畜 ^{チョク} 逐 ^{チョク}		近世唐音	
-ʔ 叔 ^{シク} 熟 ^{ジュク} 福 ^フ 畜 ^{チク} 粥 ^{シヨク} 縮 ^{シヨク} 肉 ^{ニク} 六 ^{ロク} 育 ^{イク} 目 ^メ	-φ -t -ʔ -k 哭 ^ク 禿 ^ト 木 ^{モク} 卜 ^{ハク} 速 ^{ソク} 屋 ^ウ 獨 ^{ドク} 穀 ^{コク} 族 ^{ジュク} 綠 ^{ロク}	台湾閩南語	

声門閉鎖音について精査されなかったのは、何らかの理由有ったことかとも思われるが、右の事実よりして、もしそうされていれば、その説はさらに完全なものとなっていたに違ひなく、聊か惜しまれるところである。

ところで、博士はまた、同論文において、日本漢字音の中にも、(古く中国中央語に起きた)同様の变化を写し伝えるものがある旨、指摘されている。いわゆる新漢音(天台漢音)の例、「十(しう・しつ・し)」「仏(ふつ・ふ)」「白(はき・はい)」「十(しう・しつ・し)」等があるが、次に、これについて少し考えてみたいと思う。表Ⅲを御覧頂きたい。

			臻	江		
質	櫛	没	没	覚	燭	沃
-t	-t	-t		-k	-k	-k
-ツ 失 ^シ 日 ^ニ -チ 七 ^シ				-ク	足 ^ゾ -ク	-ク
必 ^ヒ 質 ^シ -一 ^{イチ} 畢 ^ヒ 悉 ^シ 吉 ^キ -キ				学 ^{カク} 覚 ^{カク}	欲 ^{ヨク} 辱 ^{ニク}	糲 ^ク
日 ^ジ -ツ 七 ^シ -チ 七 ^シ 実 ^シ		-ツ		濁 ^{ダク} -ク	足 ^ゾ -ク 觸 ^{ソク}	-ク
実 ^シ 一 ^{イチ} 一 ^{イチ} 悉 ^シ 逸 ^{イツ} 日 ^ジ		没 ^{ボツ} 忽 ^{コツ}		学 ^{カク} 覚 ^{カク}	欲 ^{ヨク} 獄 ^{ギョク}	糲 ^ク
悉 ^シ 吉 ^キ -φ 失 ^シ 七 ^シ 疾 ^シ 必 ^ヒ 質 ^シ 一 ^{イチ}				-φ 覚 ^カ 濁 ^{ジツ}	觸 ^{ソク} -φ 続 ^{ソク} 獄 ^コ 足 ^ス	-φ 毒 ^{ソク}
-φ 実 ^シ -ツ 悉 ^シ		-φ -ツ			足 ^ゾ -φ 足 ^ゾ -ツ	-ツ
疾 ^チ 一 ^{イチ} 実 ^シ 疾 ^チ		没 ^モ 没 ^ク 咄 ^{トツ}			欲 ^{ヨク} 欲 ^{ヨク} 獄 ^コ 獄 ^コ	毒 ^{トク} 糲 ^ク
-k -? 吉 -t 質	-k -t	-φ -? -t	-φ -? -k	-φ -? -k	-φ -? 東 -k 粟	-φ -? -k
疾 弼 七 筆 悉 逸 实 必 失 匹 乙 鄰 一 密 栗 蜜 日 秩	悉 櫛	没 訥 勃 突 骨 窟 卒 猝 忽	逸 鬻 剌 濁 学 璞 岳 擲 覺 捉 朔 渥	足 玉 蜀 幘 続 旭 躅 曲 曲 酷 欲 錄 辱 觸 促 贖	瑠 篤 僕 楷 沃 毒 糲	

山				物	迄	術	
點	銛	末	曷	-t	-t	-t	
-ツ -チ		-ツ -チ	薩 ^サ -ツ	輻 ^フ -ツ		-ツ	-φ 密 ^ミ
ハ ^ハ 滑 ^{クワ}		跋 ^ハ 跋 ^ハ	闕 ^ク 達 ^タ	弗 ^フ 佛 ^フ		出 ^{シュ}	一 ^イ
-ツ	-ツ	-ツ	-ツ	-φ 物 ^フ -ツ 勿 ^フ	-ツ	-ツ	室 ^シ
ハ ^ハ 察 ^サ	刹 ^サ 殺 ^サ	活 ^ク 脱 ^タ	薩 ^サ	佛 ^フ 弗 ^フ 佛 ^フ	乞 ^キ	出 ^{シュ}	
-φ		-φ	薩 ^サ -φ	-φ		-φ	
ハ ^ハ		脱 ^ト	渴 ^カ 達 ^ダ	弗 ^フ 佛 ^フ		出 ^{シュ}	
-ツ	-φ -ツ	-ツ	-ツ	-ツ			
ハ ^ハ	刹 ^サ 刹 ^サ	脱 ^ト	闕 ^ク 薩 ^サ	佛 ^フ 勿 ^フ			
-φ -2 -t	-p -2 -t	捋 ^リ -2 -t	-2 -t	-φ -t	-t	-t	-φ
咀 ^ツ 八 ^ハ 拔 ^ハ 刷 ^ハ 滑 ^ハ	納 ^ナ 剔 ^キ 刮 ^カ 刷 ^ハ	撥 ^ハ 奪 ^ハ 濼 ^ハ 跋 ^ハ 括 ^ハ 闕 ^ハ 撮 ^ハ 活 ^ハ	葛 ^カ 渴 ^カ 曷 ^ハ	拂 ^フ 物 ^フ 鬱 ^フ	訖 ^キ 乞 ^キ 迄 ^キ	黜 ^{シュ} 橋 ^{キョウ} 出 ^{シュ} 術 ^{ジュツ} 恤 ^{シュツ} 聿 ^{シュツ} 律 ^{リツ}	暨 ^{キョウ}

		宕			
葉		鐸	屑	薛	月
-k		-k	-t	-t	-t
略 ^{リヤク}		各 ^{カク}	-φ 切 ^キ -ツ -チ	悦 ^{エツ} -ツ 說 ^{セツ}	日 ^{ジツ} -ツ 月 ^{グヅツ}
葉 ^{ヤク} 着 ^{チャク}		薄 ^{ハク} 惡 ^{アク}	涅 ^エ 結 ^{ケツ} 涅 ^{ネチ} 決 ^{ケツ}	別 ^{ベツ} 滅 ^{メツ}	髮 ^{ハツ} 越 ^{ヨツ}
着 ^{チャク} 若 ^{ジャク}	-φ -ツ	各 ^{カク} 落 ^{ラク}	-ツ	舌 ^{セツ} 說 ^{セツ}	-ツ
縛 ^{バク} 葉 ^{ヤク}		各 ^カ 楽 ^{ラク} 莫 ^{バク} 作 ^{サク} 惡 ^{アク}	結 ^{ケツ}	別 ^{ベツ} 滅 ^{メツ}	發 ^{ハツ} 月 ^{グヅツ}
-φ		樂 ^{ラク} -φ 作 ^{サク}	-ツ	說 ^{セツ} -φ	-φ
若 ^{ジャク}		惡 ^{アク} 各 ^カ	結 ^{ケツ}	滅 ^{メツ} 絕 ^{セツ}	發 ^{ハツ}
若 ^{ジョツ}	-φ	瑒 ^{ロツ} -ツ 作 ^{サク}	-ツ	-φ 說 ^{シエツ}	-ツ
葉 ^{ヨツ} 略 ^{リョツ}		作 ^{サク} 惡 ^{アツ} 落 ^{ロツ}	切 ^{チエツ}	蒸 ^{セツ} 滅 ^{メツ} 蒸 ^{ゼツ}	發 ^{ハツ} 日 ^{ジツ}
-φ -? 嚼 ^{カク}	-φ	落 ^{ラク} -? -k 郭	-φ -p -? -t	-p 滅 ^{メツ} -? 驚 ^{キョウ} -t 薛 ^{セツ} 警 ^{キョウ}	-? -t
脚 ^{キョク} 杓 ^{キョク}	着 ^{チャク} 郤 ^{キョク}	錯 ^{サク} 惡 ^{アク}	切 ^{キエツ} 涅 ^{ネチ} 鉄 ^{テツ}	竊 ^{セツ} 列 ^{リエツ} 缺 ^{ケツ} 別 ^{ベツ} 缺 ^{ケツ} 舌 ^{セツ} 悦 ^{エツ} 哲 ^{セツ} 絕 ^{セツ} 折 ^{セツ} 劣 ^{レツ} 徹 ^{テツ} 雪 ^{セツ} 熱 ^{ネツ} 訥 ^{ネツ} 傑 ^{セツ} 說 ^{セツ} 劣 ^{レツ}	揭 ^{ケツ} 髮 ^{ハツ} 伐 ^{ハツ} 幘 ^{ハツ} 月 ^{グヅツ} 關 ^{クヅツ} 越 ^{ヨツ}
約 ^{キョク} 略 ^{リョク} 削 ^{キョク} 葉 ^{ヤク}	縛 ^{バク} 芍 ^{シヤク} 遼 ^{リョウ} 虐 ^{キョク} 灼 ^{キョク} 弱 ^{リョク} 爵 ^{キョク}	博 ^{ハク} 諾 ^{ダク} 各 ^{カク} 愕 ^{ガク} 作 ^{サク} 昨 ^{サク} 索 ^{サク}	驚 ^{キョウ} 整 ^{キョウ} 蔑 ^{キョウ} 姪 ^{キョウ} 結 ^{ケツ} 玦 ^{ケツ} 抉 ^{ケツ}		

咸	深	梗			
合	緝	錫	昔	麥	陌
-p	-p	-k	-k	-k	-k
-ツ -ウ -フ	-ツ -ウ -フ	-キ -ク	積 ^{シヤク} ク 積 ^{シヤク}	辟 ^{ヒヤク} 益 ^{ヤク}	-ク 百 ^{ヒヤク} 白 ^{ヒヤク}
合 ^{カッ} 合 ^{カウ} 答 ^{ダフ} 答 ^{ダツ} 雜 ^{ザウ}	及 ^キ 入 ^{ニウ} 及 ^{キフ} 十 ^{シウ}	歷 ^{レキ} 寂 ^{シヤク}	逆 ^{ゲキ} -キ 積 ^{セキ} 積 ^{セキ} 益 ^{エキ} 亦 ^{エキ}		-イ -キ 白 ^{ハイ} 百 ^{ハキ} 白 ^{ハキ}
-ウ	集 ^シ -φ -ユ -フ 習 ^シ 十 ^ジ 及 ^キ 習 ^{ジュ} 及 ^{キフ} ジ入 ^シ		積 ^シ -φ 亦 ^イ 逆 ^ニ	-φ 獲 ^ワ 責 ^サ	-φ 白 ^ハ
-φ -ツ	-φ 入 ^ジ -ツ 執 ^チ 執 ^チ 十 ^シ 急 ^{キツ} 及 ^キ	-φ -ツ 歷 ^リ 歷 ^{レツ}	-ツ 益 ^イ 積 ^ジ		-ツ 百 ^{ベツ} 白 ^{ベツ}
合 ^ホ 合 ^{ホッ} 答 ^ダ 答 ^{ダッ}					
-? -p	-φ -m -k 褶 -p 濕 立 斟 焜 十 泐 邑 蟄 吸 急 入 泣 緝 及 集 宐 習 執	-φ -? -k 戚 壁 劈 撇 的 覓 績 迷 寂 狄 錫 激 霰	-φ -? 席 -k 繹 射 擲 碧 隻 積 碧 尺 辟 辟 石 擗 擗 辭 積 積 益	-? -k 麥 槩 摘 棟 隔 覆 責 獲 策 画	-φ 客 -? -k 索 額 赫 伯 踏 柵 逆 拍 劇 唾 白 陌 拆 宅 格
答 納 咨 閣 合 雜 跋					

曾							
德	帖	乏	業	葉	狎	洽	盍
-k	-p	-p	-p	-p	-p	-p	-p
息 ^ト 得 ^ク 塞 ^ト 德 ^ク	-ウ	-ウ	-ツ -ウ	-ウ			-ウ
特 ^ト 或 ^ク 勒 ^ロ 国 ^コ	妾 ^{セツ}	ホウ法 ^{ハツ}	業 ^コ 劫 ^コ 業 ^コ	葉 ^{セウ} 摂 ^{セウ}			塔 ^{タツ}
德 ^ト ク 勒 ^ロ 則 ^ソ 黒 ^コ 賊 ^ソ 得 ^ト		-ツ -ウ 法 ^ハ 法 ^ハ	-ツ 業 ^グ -ウ 劫 ^ケ 劫 ^ケ 怯 ^コ	摂 ^{セウ} -ウ 葉 ^{エウ} 獵 ^{レウ}			-ウ 塔 ^{タツ}
-φ -イ		-φ	-φ	-φ -ウ			
得 ^テ 勒 ^{レイ} 塞 ^ス		法 ^ハ	業 ^ネ	摂 ^セ 葉 ^{ヨウ}			
塞 ^セ 国 ^ク ヲツ 得 ^テ 德 ^ト 黒 ^ヘ 賊 ^ソ 惑 ^{ホツ}		-φ -ツ 法 ^フ 法 ^ハ	-ツ 劫 ^ケ 業 ^ネ				
-t -ʔ -k	-m -ʔ -p	-t	-m -ʔ -p	-t -ʔ -p	-t -ʔ	-ʔ -p	-t -ʔ -p
賊 ^ソ 北 ^{ホク} 墨 ^{モク} 塞 ^ソ 特 ^{トク} 德 ^{トク} 勒 ^ロ 刻 ^{コク} 国 ^{コク} 則 ^{ソク} 効 ^{コウ} 或 ^{オク}	捻 ^ニ 頰 ^{ケツ} 估 ^コ 協 ^{コウ} 牒 ^{トク} 偃 ^{エン} 妾 ^{セツ} 蘿 ^ラ	法 ^ハ 乏 ^{ハツ}	脛 ^{ケツ} 脅 ^{コウ} 塚 ^{ソウ} 劫 ^{ケツ} 怯 ^コ 業 ^ネ	捷 ^{セツ} 鍾 ^{チュウ} 輒 ^{ジュツ} 獵 ^{レツ} 聶 ^{ニエツ} 接 ^{セツ} 笈 ^{コク} 葉 ^{エツ} 摂 ^{セツ} 涉 ^{セツ} 妾 ^{セツ} 挾 ^{ケツ}	嬰 ^{エイ} 甲 ^{カウ} 鴨 ^{コウ} 狎 ^{ハツ}	挿 ^{ソウ} 割 ^{カク} 霎 ^{セツ} 夾 ^{カツ} 洽 ^{カツ} 恰 ^{カツ}	榻 ^{タツ} 踏 ^{トク} 納 ^{ナツ} 臘 ^{ラツ} 噉 ^{タン}

-t		-p		韻尾
山	臻	咸	深	撰
ツチ	チツ ツ	ウフツ	フウツ	呉音
ツ	ツチ ツ	ウツ	ウツ	新漢音
∅	∅	∅ウ	∅フユ	中世唐音
ツ	ツ	ツ	ツ	近世唐音

この表は、日本漢字音における入声韻尾の実態を把握するため、信頼すべき史料によってその表記形を調べ、整理して示したものである。「日本漢字音」の欄・二段目に、新漢音の形を掲げる。(最下欄には、比較のために、台湾閩南語の発音を示しておいた。)これによれば、日本漢字音における入声韻尾の形は、伝来時期によって次のように異なっていることが分かる。

職			
-k			
食 ^{シキ}	-キ -ク	億 ^億	即 ^即
識 ^{シキ}		直 ^{チキ}	力 ^{リキ}
色 ^{シキ}		殖 ^{シキ}	
∅	-ツ 識 ^{シキ} -キ -ク	北 ^{ホク}	-ツ -キ
食 ^{シキ}	億 ^億	賊 ^{ソク}	惑 ^{クワク}
	色 ^{シキ}		国 ^{クニ}
	即 ^{シキ}		
	色 ^セ		
	逼 ^{ヒツ}		
	極 ^{キツ}		
-∅	即 ^{チツ} -ツ	賊 ^{ソク}	-∅
	食 ^{シツ}		
	即 ^{チツ}	黒 ^{クワク}	
	殖 ^{シツ}	国 ^{クニ}	
	食 ^{シツ}		
	力 ^{リツ}		
-t	-ʔ	域 ^{イキ}	-k
		息	
直	匿	測	
職	極	色	
寔	食	逼	
力	憶	識	
即	戈	復	
		殛	
		洫	

-k				
曾	梗	宕	江	通
クキ	ク	ク	ク	ク
クキ	キ	クツ	ク	クツ
∅イ	∅	∅	∅	∅
ツ	ツ	ツ	ツ	ツ

※同一欄内、上位のものほど多例。

古く伝来した呉音が明瞭な韻尾の区別を持ち、比較的新しく伝来した中世唐音がそれを(或るいは韻尾そのものを)持たないことからすれば、確かに、新漢音は、韻尾が消失しようとする時期の複雑な様相を反映したもののようにも見受けられる。

しかしながら、ただそれだけでは、それ以外の考え方(例えば、「誤記・無表記等による、表記上の混乱にすぎない」とするような)も

成り立ち得ないわけではなく、立論の根拠が甚だ薄弱であるということになりかねない。

台湾閩南語における韻尾区別の混乱が、新漢音の「表記の混乱」ときわめて良く似た状態を呈することは、その根拠を確かなものとする上で、甚だ重要な意味を持つものである。というのも、両者の符節を合わせたような姿は、偶然の所産とは見なし難く、明らかに、或る共通の音韻的事実を背景に持つものと考えられるからである。有坂博士は、それについて、次の如き考え方を示しておられる——(新漢音の伝来当時、中国中央語に)入声韻尾の三内の別は勿論厳存したが、その響は余程微弱なものであり、…大体に於てやはり現代の台湾音に於ける状態に近いものではなかったろうかと思われる^た。と。

つまり、新漢音の「表記の混乱」は、「単に表記上の混乱にすぎないもの」ではなく、実質的な音韻区別の混乱を背景に持つものであり、しかも、その音韻混乱の様相は、現代の台湾閩南語に見られる如きものではなかったか、と言っているのである。

他に、博士の示しておられる漢藏対音・朝鮮漢字音等の例をも参照すれば、おそらくは、それが最も妥当な見方かと思われるのであるが、いずれにしても、こういった問題の解明に閩南語の果たし得る役割りは、決して小さくないのである。

三 鼻音韻尾の実態

次に、三内鼻音韻尾の実態について、検討してみたいと思う。

前章のやり方にならって、古代中国語と台湾閩南語との比較を行

なってみると、次のような結果を得ることができる。

表IV

			中古音韻尾	台湾閩南語
-ŋ	-n	-m		
1 (0.2%)	5 (1.3%)	122 (79.2%)		-m
19 (4.7%)	301 (76.0%)	8 (5.2%)		-n
276 (68.3%)	15 (3.8%)	3 (1.9%)		-ŋ
105 (26.0%)	68 (17.2%)	15 (9.7%)		-φ ₁
3 (0.7%)	7 (1.8%)	6 (3.9%)		-φ ₂
404 (100.0%)	396 (100.0%)	154 (100.0%)		計

※「-ŋ」「-n」は、各々、「韻尾の存在がほとんど認められず、主母音に鼻音的要素(鼻母音化)が認められる」こと、「韻尾の存在が認められず、主母音にも鼻音的要素が認められない」ことを示す。

古代中国語において鼻音に唱えられた字九五四例について調査したわけであるが、これにより、①②③の如き事実を見出すことが可能である。即ち、

- ① 古代中国語における鼻音韻尾 -m -n -ŋ は、台湾閩南語において、70% 程度保存されている。
- ② 残り 20% 程度程度のものは、或るいは無韻尾化し、或るいは他

の韻尾と混同するなどして、区別の曖昧化する様相を見せている。

③無韻尾化の傾向が目につくのは、三者のうち、-ㄨである。云々。

やはり、鼻音韻尾についても、入声韻尾の場合と同様、区別の曖昧化する傾向が見出だされるわけであるが、その進み具合については両者間に若干の差が認められ、「全般に、鼻音韻尾の方がよく古態を存し、曖昧化の率が低い」と言って良さそうである。これは、両者の発音の時間的長短や明瞭度に開きがあり、聞き取りに難易の差が生ずるためかと思われる。

表V
-ㄨ韻尾の無韻尾化が著しいことは注目に価するが、それも畢竟、

右の事実に基づくものようである。表IVから推察されるところでは、台湾閩南語の三内鼻音韻尾は、①主母音の鼻音的要素が強まるとともに、韻尾の存在が微弱になる↓②韻尾がほとんど認められなくなる↓③主母音の鼻音的要素も失なわれ、韻尾は全く認められなくなる、の如き段階を経て消失して行くものようであり、その場合、-ㄨ韻尾は、①の状態と最も紛れやすい性格を持っていること、改めて指摘するまでもないであろう。

なお、このことに関連して、日本漢字音の新漢音・中世唐音には、かなり興味深い事実が認められる。まず、次の表を御覧下さい。

通		撰	
(拗)東送		韻	
送・董・(直)東		中古音音価	
-ㄨ	-ㄨ	呉音	日本漢字音
-ㄨ	-ㄨ	新漢音	
衆風 中	通ウ 動ウ 同ウ	空ク 東ト	中世唐音
衆充	東ウ 通ト	痛コ 動コ	
衆充	衆シ 終シ	空ク 同ク	近世唐音
隆衆	総ス 空ク 東ト 通ト 同ト	蒙メ 功ク	
中衆 終	空ク 東ト 通ト 童ト	蒙メ 功ク	台湾閩南語
融諷 鳳夢 仲衆 銃	-ㄨ -m	蓬蒙東同 公空	
弓穹 窮終 充雄 隆中 髙	翁 洞 贖 控 送 弄	蓬蒙東同 公空	

宕		江			
漾・養・陽	宕・蕩・唐	絳・講・江	用・腫・鍾	宋・腫・冬	
-ㄩ	-ㄩ	-ㄩ	-ㄩ	-ㄩ	
文 ^{チヤウ} 養 ^{リヤウ} 忘 ^フ ウ 量 ^{リヤウ} 王 ^フ 香 ^{カウ} 掌 ^{サウ} 往 ^{ワウ} 向 ^{カウ} 方 ^{ハウ} 相 ^{サウ} 仰 ^{ワウ} 響 ^{カウ} 放 ^{ハウ}	広 ^ク ハ-ウ 当 ^{タウ} 湯 ^{タウ} 剛 ^{カウ} 蔵 ^{サウ} 光 ^{ハウ}	-ウ 講 ^{カウ} 懂 ^{トウ}	供 ^ク - ^フ 種 ^{シユウ} 重 ^{チュウ} ウ 恭 ^ク 龍 ^{リョウ} 奉 ^フ 縱 ^{ジュウ} 勇 ^{ユウ} 勇 ^ユ 從 ^{ジュウ} 恭 ^ク		
養 ^{ヤウ} 妄 ^{バウ} -ウ 王 ^{ワウ} 望 ^{ベウ} 往 ^{ワウ} 香 ^{キヤウ} 方 ^{ハウ} 向 ^{キヤウ} 放 ^{ハウ} 強 ^{カウ}	光 ^{クワウ} -ウ 広 ^{クワウ} 当 ^{タウ} 傍 ^{ハウ} 蔵 ^{サウ} 黄 ^{クワウ}		- ^フ 種 ^{シユウ} 用 ^{ヨウ} -ウ 供 ^ク 重 ^{チュウ} 奉 ^{ホウ} 恭 ^ク 從 ^{ジュウ} 凶 ^{キョウ}	-ウ	統 ^{トウ}
相 ^{シヤウ} 王 ^{ヤウ} 亡 ^{モウ} -ウ 像 ^{ジャウ} 杖 ^{ジャウ} 香 ^{キヤウ} 样 ^{シヤウ} 量 ^{リヤウ} 養 ^{ヤウ} 方 ^{ハウ} 常 ^{シヤウ} 章 ^{ジャウ} 楊 ^{ヤウ} 放 ^{ハウ}	浪 ^{ラウ} 広 ^{クワウ} -ウ 蔵 ^{ザウ} 曠 ^{クワウ} 当 ^{タウ} 剛 ^{カウ} 蕩 ^{ダウ} 光 ^{クワウ}		- ^フ - ^ン 供 ^ク -ウ 恭 ^ク 龍 ^ル 奉 ^{ブン} 共 ^ク 奉 ^{ホウ} 重 ^{ジュン} 重 ^{チュウ} 用 ^{ヨウ}	- ^ン	- ^フ 風 ^フ
長 ^{チヤン} 養 ^{リヤウ} 望 ^{ワン} - ^ン 杖 ^{ジャウ} 陽 ^{ヤウ} 香 ^{キヤン} 量 ^{リヤウ} 王 ^{ワウ} 向 ^{フワン} 方 ^{ハン} 兩 ^{リヤウ} 仰 ^{リヤン} 況 ^{キヤン} 舫 ^{フワン}	広 ^{クワン} - ^ン 当 ^{タン} 唐 ^{タン} 剛 ^{カン} 浪 ^{ラン} 光 ^{クワン}	幢 ^{ツワン} - ^ン 降 ^{キヤン} 降 ^{キヤン}	龍 ^ル 龍 ^{リョウ} 供 ^ク - ^ン 從 ^{ジュン} 恭 ^ク 種 ^{チュン} 共 ^ク 峯 ^{フン} 訟 ^{ソウ} 重 ^{チュウ} 奉 ^{フン}	- ^ン	統 ^{トウ}
賞 ^{シヤウ} 詳 ^{シヤウ} 常 ^{シヤウ} 亡 ^{モウ} - ^ㄩ 上 ^{シヤウ} 陽 ^{ヤウ} 央 ^{ヤウ} 張 ^{ジャウ} 鞅 ^{ヤウ} 狂 ^{キヤウ} 香 ^{キヤウ} 偃 ^{ヤウ} 莊 ^{ジャウ} 響 ^{シヤウ} 王 ^{ワウ} 羊 ^{ヤウ} 長 ^{ジャウ} 瘡 ^{シヤウ} 壤 ^{シヤウ} 爽 ^{シヤウ} 良 ^{リヤウ} 羌 ^{キヤウ} 牀 ^{シヤウ} 獎 ^{シヤウ} 昉 ^{シヤウ} 將 ^{ジャウ} 強 ^{キヤウ} 霜 ^{シヤウ} 槍 ^{シヤウ} 髣 ^{シヤウ} 鏘 ^{ジャウ} 章 ^{ジャウ} 方 ^{フワン} 想 ^{シヤウ} 罔 ^{ワン} 牆 ^{キヤウ} 昌 ^{チャウ} 芳 ^{フワン} 像 ^{シヤウ} 仰 ^{リヤウ} 相 ^{シヤウ} 商 ^{シヤウ} 房 ^{フワン}	浪 ^{ラウ} 慌 ^{ハウ} 儻 ^{タウ} 郎 ^{ラウ} 囊 ^{ナウ} - ^ㄩ 枕 ^{チン} 晃 ^{クワン} 蕩 ^{ダウ} 光 ^{クワン} 岡 ^{カウ} 曠 ^{クワン} 螃 ^{パウ} 囊 ^{ナウ} 汪 ^{ワウ} 臧 ^{ザウ} 幫 ^{パウ} 潢 ^{フワン} 宕 ^{ダウ} 慷 ^{カウ} 荒 ^{ハウ} 倉 ^{サウ} 滂 ^{パウ} 綱 ^{クワン} 蒼 ^{サウ} 黃 ^{ワウ} 蔵 ^{ザウ} 傍 ^{パウ} 抗 ^{クワン} 決 ^{ケツ} 榜 ^{パウ} 桑 ^{サウ} 茫 ^{マウ} 菲 ^{フイ} 朗 ^{ラウ} 髡 ^{クワン} 鳶 ^{ユウ} 當 ^{ダウ} 喪 ^{サウ} 広 ^{クワン} 莽 ^{マウ} 忼 ^{クワン} 湯 ^{タウ} 盎 ^{アウ} 汪 ^{ワウ} 党 ^{ダウ} 航 ^{ハウ} 堂 ^{タウ}	- ^ㄩ 降 ^{キヤン} - ^ㄩ 講 ^{カウ} 腔 ^{カウ} 項 ^{キヤウ} 邦 ^{パウ} 胖 ^{パウ} 厖 ^{マウ} 懸 ^{ケン} 幢 ^{ツワン} 絳 ^{ケウ} 江 ^{カウ} 稷 ^{キツ} 淙 ^{サウ} 巷 ^{キヤウ} 雙 ^{シヤウ} 肛 ^{カウ}	- ^ㄩ 俸 ^{フン} 冢 ^{カウ} 鍾 ^{チュウ} - ^ㄩ 腫 ^{チュウ} 寵 ^{チュウ} 匈 ^{フワン} 府 ^フ 供 ^ク 拱 ^ク 容 ^{ユウ} 封 ^{フン} 共 ^ク 恐 ^ク 龍 ^{リョウ} 峯 ^{フン} 種 ^{チュン} 腫 ^{チュウ} 茸 ^{キョウ} 逢 ^{フン} 縱 ^{ジュウ} 擁 ^{ユウ} 蹤 ^{ジュウ} 備 ^{フン} 頌 ^{ソウ} 隴 ^{リョウ} 從 ^{ジュウ} 重 ^{チュウ} 用 ^{ヨウ} 冗 ^{ユウ} 松 ^{ソウ} 醜 ^{シウ} 甬 ^{ユウ} 奉 ^{フン} 恭 ^ク	統 ^{トウ} - ^ㄩ	綜 ^{ソウ} 冬 ^{トウ} 佟 ^{トウ} 彤 ^{トウ} 農 ^{ノウ} 攻 ^ク 宗 ^{ソウ} 鬆 ^{ソウ}

		梗		
勁・静・清	諍・耿・耕	敬・梗・庚		
-ㄱ	-ㄱ	-ㄱ		
聲正精領名-ウ 城性清令明ミヤウ 盛姓淨ヤウミヤウ 成聖靜ヤウ頃ヒヤウ <small>ミヤウ</small> 井兵 <small>ク</small> 頃		行ウ 敬ヤウ 生ヒヤウ 病猛 <small>ミヤウ</small>	像常上嘗 <small>ヤウ</small>	
正請聖 聖淨 靜精 情清	境ケイ 令レイ 精セイ 清セイ	名ベ-イ 明ベイ 永エイ 竟ケイ	命ベ-イ 行ケイ 敬ケイ 生セイ	上ヤウ 想シヤウ 像ヤウ 傷ヤウ 常ヤウ 狂長場量 將障相 <small>ヤウ</small>
成淨性聖聲 淨精 清永 請輕	令リ 精シ 清シ 請シ	名シ-ン 明シ 永シ 輕シ	行ア-ン 敬キ 生サ 病シ 命シ	上ヤウ
聖聲成正 令清淨 令頸 明環頸 境平 境名	令リ 清シ 淨シ 令リ	明シ-ン 環ウ 平シ 名シ	敬キ 坑カン 生ス 病シ 行シ	尚ヤウ 祥ヤウ 商ヤウ 常ヤウ 上ヤウ 將ヤウ 掌ヤウ 唱ヤウ 相ヤウ
聘井嬰 情請盈 淨静領井 性省瓊名 鄭頃宮輕 聖穎征頸 盛整声精 令領成清 握餅情	令リ 令リ 令リ 令リ 令リ 令リ 令リ 令リ 令リ	名シ-ン 名シ 名シ 名シ 名シ 名シ 名シ 名シ 名シ	硬町行 行冷横 柄丙兵彭 病警平盲 命影京癉 慶烹卿庚 映膨兄鎗 孟榮生 更猛亨	硬-ㄱ 鑽 宏倅瑋 僂柵馨 幸打繡 硬橙迸 俾 耕 争
			礦-ㄱ 璟 明憬磅 盲浜榜趙 癉偃瞳 敬根 競儉 蝗擊 梗	-ㄱ 讓暢養 醬仗往 孃薑漾釀壯 唱文誑彊狀 掌況障放 兩旺餉訪 尚防 向妄 亮帳

この表は、日本漢字音における喉内鼻音韻尾の実態を把握するため、信頼すべき史料によってその表記形を調べ、整理して示したものである。(形式は入声韻尾の表Ⅲの場合と同様。)これによれば、日本漢字音における喉内鼻音韻尾の形は、伝来時期によって次の如くに異なっていることが分かる。

曾		徑・廻・青
證・拯・蒸	燈・等・登	
-ㄐ	-ㄐ	-ㄐ
乗 ^{シヨウ} 勝 ^{シヨウ}	燈 ^{トウ} 能 ^{ノウ} 増 ^{ゾウ} 曾 ^{ソウ}	聽 ^{チヤウ} 定 ^{ヂヤウ} 經 ^{キヤウ} 頂 ^{チヤウ}
乘 ^シ 勝 ^シ	燈 ^{トウ} 能 ^{ノウ} 増 ^{ゾウ} 曾 ^{ソウ}	停 ^{テイ} 靈 ^{レイ} 經 ^{ケイ} 聽 ^{テイ}
證 ^シ 稱 ^シ 勝 ^シ 承 ^シ	能 ^{ネン} 僧 ^{ソウ} 恒 ^ケ 等 ^{トウ}	頂 ^{チン} 定 ^{ヂン} 靈 ^{リン} 冥 ^{ミン} 徑 ^{キン}
稱 ^シ 勝 ^シ	肯 ^{ケン} 等 ^{トウ} 能 ^{ネン} 興 ^{キョウ}	刑 ^{シン} 經 ^{キン} 頂 ^{ヂン} 瓶 ^{ピン} 聽 ^{テイ} 冥 ^{ミン}
-ㄑ ² -ㄑ ¹ 盈 認	-ㄋ 膺 認	定 星 徑 靈
繩 證	澄 仍 冰	腥 並 丁 瓶 馨
	升 證 徵	茗 汀 甯 刑
	興 乘 兢	頂 庭 零 焚
	蠅 勝 凝	挺 寧 姪
	拯 蒸 蒸	醒 經 罄
剩 稱	贈 增	訂 菁
應 承	僧	聽 青

-ㄐ					韻尾
曾	梗	宕	江	通	攝
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	呉音
ウ	イウ	ウ		ウ	新漢音
ン	ン	ウ		ウン	中世唐音
ン	ン	ン	ン	ン	近世唐音

兼同一欄内、上位のものほど多例。

新漢音と中世唐音について、若干の表記の不統一（ないし区別）が認められる（新漢音||梗撰イorウ、他ウ||、中世唐音||梗撰・曾撰ン、他ウ||）。

新漢音については、或るいは、例の「表記上の混乱」として済ませることも可能かと思われるが、中世唐音の場合はそうも行かないようである。梗撰・曾撰の「ㄅ」韻尾を表記するのに用いられた「ㄣ」は、本来、舌内鼻音韻尾「ㄣ」の表記に用いられるべきものではなく、標示する音韻の相違が、「イ」↕「ウ」の相違などに比べ、はるかに大きいこと、言うまでもない。これについては、いかに考えるべきなのであろうか。

——実は、これについては、既にかんがりの研究が行なわれ、次のような解釈が与えられている。即ち、△中世唐音史料に見られる「ㄅ」韻尾の「ㄣ」表記は、実は、「ㄅ」を表記したのではなく、その音韻変化した形「ㄣ」を正しく表記したものである。▽というのである（詳しくは、有坂秀世博士「諷経の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態」||「国語音韻史の研究」増訂新版所収||を参照のこと）。新漢音に見られる表記の区別も、それとほぼ同様の背景||梗撰等の「ㄅ」韻尾が舌音化しつつあった||を推測させるとされて（詳しくは、奥村三雄先生「喉内韻尾の国語化」||国語国文19の3||等を参照のこと）。

結局、△閩南語等若干の方言を除く中国の諸方言においては、既に、早く「ㄅ」と「ㄣ」の混同・「ㄣ」と「ㄣ」の混同等々が起きており、日本語字音の新漢音・中世唐音等は、たまたまそれを写し取ったのである。▽と言えようである。閩南語は、それら諸方言の後を緩々と追っていることになる。

ちなみに、台湾閩南語の状態は次の通りである。

曾 -ㄣ	梗 -ㄣ	宕 -ㄣ	江 -ㄣ	通 -ㄣ	撰
					台湾閩南語
0	0	0	0	1 (1.1%)	-m
11 (26.8%)	8 (6.0%)	0	0	0	-n
28 (68.3%)	28 (21.1%)	114 (95.0%)	15 (93.8%)	91 (96.8%)	-ㄣ
1 (2.4%)	97 (72.9%)	4 (3.3%)	1 (6.3%)	2 (2.1%)	-ㄅ ₁
1 (2.4%)	0	2 (1.7%)	0	0	-ㄅ ₂
41 (100.0%)	133 (100.0%)	120 (100.0%)	16 (100.0%)	94 (100.0%)	計

四、まとめ

以上、とりとめも無く述べ来た感じが強いが、ともかくも、台湾

閩南語を始めとする中国南方の諸方言が、中国語音韻史の研究のみならず、日本漢字音の如き外国借音の研究にも貴重な手がかりを提供し得ること、その一点、御理解頂けたならば幸甚である。

なお、台湾閩南語の音韻体系については、入声韻尾・鼻音韻尾をめぐる問題以外にも、中古音における頭子音m(唇音清濁)がbになること等、日本漢字音の性格に関連して究明すべき問題が少なくないが、今回は紙幅の関係で全く触れることができなかった。後考を期したいと思う。

付記

本稿を成すに当っては、奥村三雄先生の御指導を仰ぐとともに、大学院生齋村弘文氏の巨細に亘る助言を得た。記して感謝申し上げる次第である。

なお、本稿の内容の一部は、昭和五十四年度九州大学国語国文学会において発表されたことがある。

注1 台湾閩南語は、明代以降、中国本土から移住した人々によってもたらされたものであり、本土の閩南語とごく近い関係にある。特に、福建省漳州・泉州あたりのもので、それに近い性格を持つもののようにであるが、この台南市における調査では、漳州系の特徴を異えた発音が聞かれた。

調査には、台南市生えぬきの中高年男女数名の協力を得るとともに筆者(一九三四年台南市生まれ。同地にて成人)自身内省を行なって、資料を作成した。また、分析整理の際、以下の諸書を参照した。

盧淑英『台湾閩南語音韻研究』

羅常培『廈門音系』

牛島徳次・香坂順一等『中国文化叢書1・言語』

注2 ^ハ八声Vと呼び慣らわしており、古くは八種の声調を区別していたらしい形跡が有る。

注3 ここでは、隋唐時代以前の中国語 \parallel いわゆる太古漢語・上古漢語・中古漢語 \parallel の意味で用いる。

注4 「その他」とあるのは、具体的には、声化韻の如きものである。

注5 表の作成に当って、奥村三雄先生の論文「日本漢字音の体系」 \parallel 訓点語と訓点資料6 \parallel その他を参照・利用させて頂いた。

注6 「国語音韻史の研究」増補新版六〇頁(「入声韻尾消失の過程」中)。
注7 この場合、「 \emptyset 」は、実質的に同欄内有表記のものと同値と見て、特に問題として取り上げることはない。

注8